

7 長保元年十一月七日丙戌「卯刻中宮御産男子前但馬守 生昌三兼院」(『日本紀略』)

8 『権記』長保三年八月十一日条。但し、『大日本史料』所収本は、「侍所饗二十前」のみを為義とする。

9 兼澄集異本系3番・67番・68番・69番・73番・75番

10 兼澄は長保三年正月十五日若狭守を終えた(権記)後、加賀守となるまで暫く空いている。寛弘四年正月二十二日加賀守藤原兼親が卒した旨『御堂関白記』に見え、『小右記』寛弘九年四月九日条には「前加賀守源兼澄」と見えるから、恐らく寛弘四年に、卒した兼親の後を襲って、加賀守となったものと考えられる。

11 12 『小右記』長徳三年十月二十八日条に「若狭守兼隆マツ(澄)、為大宋国商人仁聴等(總)

後継云々 朝損面目悲哉」とある。

13 師房は、具平親王の一男(寛弘五年(1008)→承保四年(1077)→)

14 寛弘五年十月十七日条 敦成親王家の侍者として玄蕃亮源為善の名あり(御堂関(助)白記)・寛弘八年正月(日欠)玄蕃助為善：昇殿(権記)・長和五年正月廿九日条

玄蕃助源為善(小右記)

15 寛仁二年十月十六日、女御威子立后の条に「権大進從五下源朝臣為善兼三河守」(小右記)とある。

16 『春記』長久元年五月二十七日条に前司為善とみえる。しかし当任の期間は不明。

17 長元元年二月十九日補任(弁官補任)

18 藤岡忠美・芦田耕一・西田加代子・中村康夫(和泉書院 昭和五十八年十月刊)

19 兼澄を兼隆と誤記したものには他に『小右記』長徳三年十月二十八日条・寛弘八年九月十一日条・同十九日条等がある。「澄」と「隆」の草体の類似による誤り

であろう。

20 道済が詠進したことについては、『権記』長保三年十月七日条に「藏人道済等進御屏風和歌」とあることで明白。

同年十月九日、上東門第において一条天皇行幸のもとに、東三条院四十の御賀が催された（日本紀略・権記・小右記）。為義・兼澄らも撰ばれて屏風歌を詠進した。『権記』によって見よう。

長保三年十月七日条

今日御賀試楽也、依召候御前、有勅、見右少弁輔尹・伊賀守為義・前越前守為時・藏人道済等進御屏風和歌、（中略）

事訖各退出、撤御装束後、左大臣、内大臣・左衛門督并金吾召候御前、左大臣・左金吾^{詠カ}祿御屏風和歌、

同 九日条

参左府、被奉歌和歌二首、又祭主輔親所進和歌十二首、同付余被奏、

（中略）

於弘徽殿東庇、書御屏風四帖和歌十二首、左大臣三首・輔尹一首・兼隆三首・輔親一首
為時一首・為義一首・道隆一首

令奏覽、依勅候弓場殿、給御衣、拜舞退出

右文によって屏風歌の詠進者及び行成の染筆になることが知られる。すでに先学によって明らかにされているとおり、九日条の「兼隆」は兼澄の^{注19}

「道隆」は道済の^{注20}誤りである。十二首の中ここでは一首不足しているが、

七日条の記事からみれば後の一首は左金吾公任の和歌であつたろうか。

『栄花物語』「とりべの」には「御屏風の歌ども、上手ども仕うまつれり」として左少弁輔尹並びに兼澄の歌一首ずつがみえる。

為義は、歌よみとしての栄光をつくづく感じた事であつたろう。十月七日条の権記に見られるごとく、それまでに屏風和歌は詠進され、天皇のも

とに奉られていた様子であるから、為義の下向は、やはり八月十一日の一宮家家司としての役割を果たしてから、遅くとも九月中には出立したものと考える。

詮子四十賀屏風和歌を詠進した、これら道長に極めて親しい、しかも余り身分の不高くない歌人並びに漢詩文家を交じえた人々——兼澄・為時・輔尹・輔親・為義・道済らは、そのまゝ、長保五年五月十五日の法華三十講の折に催された道長歌合の歌人たちでもあることは注目すべき事であろう。

〈注〉

1 「国文学ノート」第九号（昭和四十六年三月）

2 東三条院詮子四十賀の屏風歌詠進についての記事

3 萩谷朴『平安朝歌合大成』長保五年五月十五日左大臣道長歌合、後十五番歌合の項。川口久雄『平安朝漢文学史の研究』第十八章第三節 本朝麗藻の詩人群。上野理『後拾遺集前後』。杉崎重遠『平安中期歌壇の研究』。後藤昭雄『平安朝漢文学論考』など。

4 『王朝歌壇の研究——別巻 藏人補任——』（桜楓社 昭和五十四年二月刊）

5 『御堂関白記』長保元年八月二十二日条「越後守道経猷馬三疋、自陸奥軍監任料馬二疋引、一疋給為義」

6 『弁官補任』には「八月」のみで日付がないが、諸記録により二十三日―二十五日までの除目がわかっている。

しかしそれは後年のことである。実は兼澄は為義を送った長保三年の正月に、加賀守の任を終えたところであった。『権記』に

一月十五日丁亥（略） 国平朝臣云、明日政可甫、明後日可申、

而不与状有其数、其中勘畢公文入大勘文之国々、寂可申下也、若当日

上卿有恩国々者、不弁公文勘文否、被仰勘之由、何為於一上之仰、差

国被仰可令申者、仍仰事由、仰武藏国寧親・若狭・国兼澄等可令申之由、

とある。後半部によって任終える運びとなった事情が分明である。長徳三

年注11以来その任にあった若狭守を——途中、大宋国の客仁聰に陵礫されると

いう不名誉な事件などもあったが——正月十五日をもって四年間の任を終

了したのだった。しかし、新たな任官のないまゝ、に新任の国司の幾人かを

送ったことだったろう。そして秋風の吹く今日、親しい為義を送るべく多

くの人々が集ったが、我が前途を思うとき、虚しさを禁じえなかったもの

であろう。50番の歌は気のおけない間柄であったであろうだけに、半ば公

的な場での詠作とは異なり、誰憚ることなく心中を表したものとなってい

る。為義の返歌の残らないことが惜しまれる。

ところで、後拾遺集四八八番の「ためよし」をめぐって『八代集抄』で

は「源為善」と注し、『作者部類』でも為義を「イ為善」としてあって、

古く源為善との混同があった様子である。

源為善は国盛の男。祖父に信明を持ち、経信の母を姉妹に、道済とは従

兄弟の關係にあたる。言うまでもなく勅撰歌人であり後拾遺集に八首入る

が、その主たる活躍期は、少し年代の下る土御門右大臣注13師房らの文化圏と

も言うべく、出羽弁らと親交があった。能因集の「ためよし」はこの人で

ある。寛弘五年―長和五年ころにかけては「玄蕃助」と記録類に見え、国

司としては、寛仁二年(1015)ころから三河・備前・備後守を歴任しているが

伊賀守にはなっていない。長久三年(1042)十月一日卒。——道長傘下にあっ

て、一条朝を中心に活躍期をもち、長和年間ころまで生存したとみられる

兼澄や、寛仁元年(1017)に没した為義らとは自らその文化圏を異にした。

また兼澄らと同時代に生きた人に為儀・藤原元輔男の為義らもいるが、

いずれも「伊賀守ためよし」には該当しない。兼澄の餞した伊賀守「ため

よし」は小町谷氏の言われるとおり橘為義である。

因みに、『袋草紙』では「諸集人名不審」に「橘為義」と訓ませている。

後拾遺集三〇七番に寛和元年花山院歌合での「為理」の歌が、作者「橘為

義」として入集しているところに起因する訓みであろうか。これについて

『袋草紙考証歌学篇』によると「神宮文庫本藍表紙二冊本」には「為義」とのみ

訓じ「同一冊本」及び「東京教育大学蔵寛文十年本」にもノリの訓は無い

由で、八代集抄など「為善」をあてることからすれば「為義の訓はタメヨ

シであろうか」とされ、袋草紙の「ノリ」の訓は「根拠不十分」と述べら

れたことも参考になる。

『兼澄集』の仮名書「ためよし」は、橘為義の正しい訓みの仮名書例で

あるといえよう。

横道にそれたが、こうして兼澄らに餞されて、伊賀守為義は国司の任に

ついたのであった。

の間の、小除目での補任ではなかったかと考えるのである。因みに前司輔尹は、六月二十八日左中弁高階信順の出家、二十九日卒去にともなう異動で、八月の除目(二十三日―二十五日か)で右少弁に任じている。^{注6} 私には、七月十三日の小除目の後、二十一日の権記に「権右少弁初参」とあるので、あるいは八月以前に権右少弁に任じられていたのではなかったかと考えているが、それは兎も角も橘為義は、七月二十三日現在すでに前司輔尹の後任として伊賀守となっていた。

さて、長保元年十一月七日誕生^{注7}の敦康親王の真菜儀が、しきたりにしたがって生後二十ヶ月の吉日を択んで、長保三年八月十一日にとりおこなわれた。家司である為義は、何かと多忙であつたろうと推察するが、女房衝重三十前、侍所饗三十前^{注8}を奉仕している。

為義の任地への出立はこの儀の後の事ででもあつたろうか。伊賀守補任の時期にこだわったのは冒頭にも述べたとおり、兼澄の饒の歌との関連においてであつた。冒頭に記したがもう一度兼澄の歌を見たいと思う。

いかのかみためよし、伊賀へまかりしに、との、さふらひ、これかれ、せんし侍しに

49 たまほこのみちのおはなにめをとめよみやこさまにそ
おほくなるらん

また、おなしひとに、せんをわたくしにし侍しに

50 かくしつ、おほくの人^{ミイ}はをしへきぬ我を、くらん
としはいつそは^{ネイ}

(松平文庫本源兼澄集による)
後者は後拾遺和歌集四八八番の入集歌でもあり、「ためよしがいがにまかりはべりけるに、人々饒たまひけるにかはらけとりて」の詞書で入っている。歌の第三句は後拾遺集に従うべきで、「をしみきぬ」でなければ意味をなさないのであろう。

前述のように為義は道長に近く仕え、しばしば道長との間を取り次ぎ、道長の使いとして行動している実態を見てきたが、49番詞書にいう「との、さぶらひ」とは、勿論道長家の侍たちであろう。兼澄もまた道長傘下の歌人の一人であつたことは、その歌集所収歌に道長関係のものがあることから首肯でき、後述する詮子四十賀の屏風歌や道長家歌合に兼澄・為義共々詠出していること等からも明白である。

冒頭に引用した小町谷氏の文章の中にも述べられているように、49番は為義が伊賀守として都を離れるに際して、惜別の心を折からの穂に出てまねく尾花に寄せたものであり、重ねての私の饒の一首には、兼澄には何時めぐつて来るか分らない送られて出立つ身となる日への願望をこめて率直に詠んだものとなっている。心としては『八代集抄』に言う如く「楊岐路滑 我之送人多年 李門波高 人之送我何月」(大江以言、和漢朗詠集)の発想を借りたものの如くである。しかし、こう歌った兼澄の置かれた状況はどうであつたろうか。たしかに小町谷氏の述べられたように兼澄は若狭守を辞してしばらく国司の任はえられなかった。^{注10} 寛弘三年の申文についても「兼澄^{者去任久}」(『御堂関白記』寛弘三年十月二日条)と注されている。

三月十八日庚寅（前略）左大臣被奏直物、仰云、令削改、次給公卿給
院宮公卿給名替国替未給等文、又申紀伊守（申）文、別功可定申、暫令
奏申文三枚致時朝廷、為義・能道、召左大臣於御前、有除目……

（『權記』）

その内容や採否については要を得ないが、七月に至って、

七月二十三日壬辰

以伊賀守為義如旧可為今上一親王家司云々

と、同じく『權記』に見える。

三月十八日の申文がこの伊賀守補任と何らかのかかわりをもったものであろうか。

二十三日条に云う「今上一親王」とは、すなわち故中宮定子腹の敦康親王である。その親王家家司・侍及び別当らを補するについては、これより前、二月二十八日の『權記』に左のごとくあり、

早朝詣桃園、左大殿枉華駕、明日此事寺カ供養事有恩問也、此次下給今朝於御前被定男一宮家司・侍・別当等文、此夕參彼殿、申悚由

行成は、明日の世尊寺供養に恩問を受けたが、その時道長から、今朝御前で定められた家司・別当等の文を下されている。行成は又翌二十九日にも、世尊寺供養の後、弘徽殿において「一宮司悦」を申している。

權記の文章には具体的には表われていないが為義の一宮親王家々司たることは、この時すでに決っていたものであろう。従って行成は七月二十五日の日記に「以伊賀守為義如旧可為今上一親王家司云々」と記したのであ

ろう。かくて伊賀守に補された後も為義は一宮家々司を交替することはなかったのである。

伊賀守の前任者は藤原輔尹であつた。後になるが『權記』寛弘元年十二月十三日条の、伊賀守為義減省申文についての条によると次のようにある。少し長文にわたるが引用してみよう。

余就庁、南所申文、伊賀守為義申減省申文、被難之旨兩端也、然而皆先例、其一、主税勘文、定納官租、散注云、過分不献、仍不足、是前司輔尹。本年帳定也、勘本年何不注其数、今一者、当任長保四五并三年申請続文、前司輔尹。申長保四年長保元二、三、而税寮勘文、長保元年勘定、其後同二三兩年注未勘、是如何者、彼不堪言上不足事、依不足不注其数也、前司申請二三年未勘者、前司任中長保三年以二年為任終、仍未勘也、後司公文勘合次可勘也……

これによつて輔尹が、長徳四年以降（或は三年からカ）長保三年にかけて伊賀守に在任したことが明らかである。ただ長保三年に入つての交替期が明確ではないが、長保三年の分は後任者の分となり、前任者は二年で終りとする旨が記されているが、長保三年の分ということからすれば正月の交替ではなかつたのであろう。

二月二十八日の一宮家司らの補任のことや三月十八日の為義を含む三名の申し文のこと、また七月二十三日の「如旧可為今上一親王家司」のことを考え合せれば、為義の伊賀守補任は三月十八日以後七月二十三日まで

久候殿上、任山城守、頗有事勤、之任之後究済公文、加之、近曾患疫、近日已愈、令候殿上、尤有便宜、亦本候殿上者之中同煩此病、平損之者為義・輔公等中可被聴欵、（略）

（『権記』）

結局、道長のまず推挙した教忠が昇殿し、後の省略部分に記されている、行成の推した明年巡爵の藏人式部丞橘行資が叙位にあずかり、右中弁説孝が藏人に補されたが、俄かな昇殿者の候補として道長の口から為義の名が上げられていることに注目しておきたい。この時肥前権守のままであったのか否か、また遥任であったのか詳らかではないが在京していることはたしかである。

また同年十月末には『権記』に

十月三十日条

参左府、奏可参春日祭氏人交名、即給為義朝臣、遣召外記重忠、為給件差文也

とあり、道長の許で勤める様子がうかがえるが、長保元年（999）八月二十二日には、陸奥軍監の任料として納められた馬二疋の中の一疋を道長から賜つてもいる。^{注5} また十月十七日には維摩会の南都下向の勅使から帰京した行成が道長物忌のため門外で為義を介して、帰参の由を申させており（『権記』）同じく十一月二十二日には

左府使為義朝臣被賜薰香、納銀莚、被白合掛・袴等（『小右記』）

とあつて、五節の帳台試に際し、五節を出した小野宮実資に左府の使とし

て、薰香などの料物を持参している。

またさらに長保二年（1000）に入ると、十月十四日、行成は為義を介して斎宮恭子女王の十一月七日に行われる着裳の事を伝え（『権記』）、翌三年（1001）正月九日には、明十日に催される倫子の生母藤原穆子七十賀の料の、屏風の色紙形依頼のため、道長の使として行成のもとへ四尺屏風四帖を送り届ける（『権記』）などなど、記録に残るだけでも、このように公私にわたり道長の許にあつて日々精励の様子を垣間見ることができる。

この間の職掌については、長徳二年大間書にみる肥後権守以上には何も分明ではないが、在京し常に道長のそば近く侍った感が窺えるところである。これより遙かに後年になるが、長和四年（1015）九月二十日、三条天皇が道長の枇杷第から新造内裏へ遷御された時に、家子・家司らに賞を与えたことがあつた。その時為義も正四位下をたまわることになるのであるが、そこでは「道長家家司」であることが明記されている（『御堂関白記』・『小右記』）。前述の様子からすれば、すでにこのころから道長の信頼あつく、忠実な家司的存在であつたらしく思われるところである。

摂関時代における特質とも言うべき、公的官僚機構の中に位置を占めながらまた一方で同時に貴顕との私的隷属関係を保って生きねばならなかった受領層の生きざまを如実に見ることができる。

三

長保三年三月（1001）為義は申文を提出した。

二

為義の年少時のことについては資料が見出せないが、前述の如き家系・環境に生れ育ち、父祖の歩んだ道に従って学問に志したであろうことは推察できる。そして、その名が記録類にはじめて見えるのは、正暦四年(993)正月九日のことである。この日、藏人・昇殿・檢非違使らの宣旨が下された。その内容は『権記』『小右記』に詳しいが、『権記』によれば、「藏人所雑色文章生橘為義」とあって、当時文章生であったこと、そしてこの日藏人所の雑色に補せられたことが知られる。以下この章では、長保三年に至るまでの約八年間の官人としての歩みを記録によって追ってみたい。

藏人所雑色となった為義は程なく藏人に拔擢されたものか。『尊卑分脈』には「藏」とあり、藏人所雑色に補されて三年後の長徳二年(996)正月二十五日付『大間書』には

肥前国 権守従口位下 橘朝臣為義

とみえる。『職原抄』などによれば、上国肥前の権守は、その官位相当が従五位下であるから、『大間書』の欠字部分は「五」を当てて考えてよいであろう。前述の「所蔵色」および『尊卑分脈』の「藏」との記載からも虚心に考えれば、当然藏人を経ての叙爵と見られるが、藏人であった期間についてはなお定かではない。

しかし憶測をあえてしてみるならば、その時期が丁度合致していると考えられる資料がある。『朝野群載』第五朝儀下「月奏」の藏人所月奏に、書式の後

右從「七月一日」迄「于晦日」卅今日。上日并夜如「件」。

長徳元年八月一日 藏人蔭孫正六位上橘朝臣

とあるのは、若しや為義である可能性がありはしまいか、と思うのである。「蔭孫」は前述の日本紀博士となり幡磨守従四位上まで進んだ祖父仲遠の蔭孫を意味するものではなかったかと。

次いで肥前権守としての修造であろうか、桂芳坊の修造に関して『権記』には次のようにみえる。

長徳三年(997)八月二十八日条

左大臣被奏云、為義所申請可修造桂芳坊事、依当忌方、可難犯土、先修理所々、明春可奉仕築垣等事、随仰将進止、仰依請、

(『権記』補遺)

忌方に当るため明春まで修造延期の申請に対する許可である。

翌長徳四年(998)は『百鍊抄』などに「今年、自夏至冬。斑瘡流行。死亡者多。古老未見如今年者」と記されるごとく、疫病により多くの死者を出した。ために公にも行幸を止め赦免、臨時の仁王会を行ない、改元の勘申を進めるなどその対策に余念なかったが道長や行成らも心神不例を押して公務にかけまわっている様子がその日記に窺える。為義も例にもれず罹病し癒えたものであろう。七月十四日孟蘭盆に際し内裏に祇候する人の無い由の勅問に関してこんな記事がある。

右兵衛佐時方来云、大内只今無祇候之人、仍為御使詣左大殿、申事由、即是可然之人忽可免昇殿事等也。御返事云、皇后宮亮教忠朝臣自宮初時^{効カ}

為義は、典雅な作風の歌人としても名高い左大臣橘諸兄から数えれば十世、長谷雄からは七世の孫にあたる。

さて、父の道文については系図にみるごとく「近江掾」と、また『大日本史料』（第二編之十二）所収の『系図纂要』には「近江大掾」とあるのみで、それ以上には手掛りを得なかったが、山口博氏は、円融・花山朝の藏人か、とされている。^{注4} また道文の兄妹に藤原有国卿室となり、式部大輔資業を産み、一条天皇の乳母となった橘三位がいることは注目されることである。

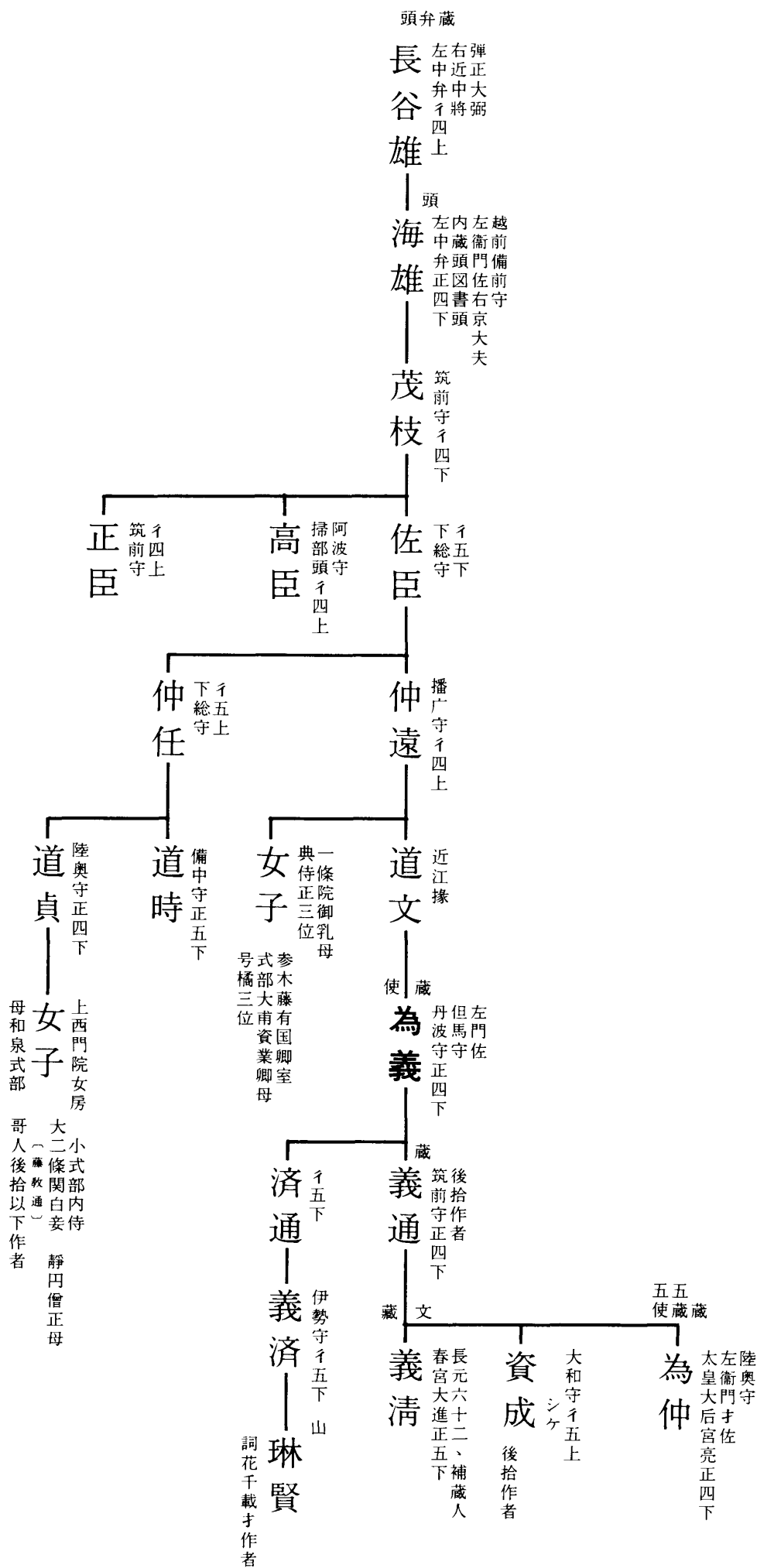
祖父の仲遠については、系図の「播磨守・従四上」の他に次のことがわかってゐる。すなわち、承平六年(936)十二月八日、日本紀講の尚復学生として参加の由(釋日本紀、講例 康保二年八月十三日)であり、天慶四年(941)四月二十七日付文章生試に関する「類聚符宣抄」には「学生蔭子従六位上橘朝臣仲遠」とあって、当時学生で蔭子として文章生試を受ける運びとなっていたことがわかる。また同六年(943)十二月二十四日の日本紀竟宴には「文章生正六位上」で列し、天兒屋根命二首を詠んでいる(日本紀竟宴和歌、新勅撰集五四三・続後撰集五七二)。さらに天曆元年(947)八月二日、藏人からの叙爵であろうか、豊前守として赴任を奏し、村上天皇から纏頭をたまわっている(日本紀略)。その後しばらく資料を得ないが康保元年(964)二月二十五日には当時散位正五位下であった仲遠に日本紀を講ずべき勅定があり(日本紀略・類聚符宣抄)、翌二年八月十三日、講日本紀博士として宜陽殿東庇に於て日本紀を講じた。時に摂津守であった(日本紀略・

釈日本紀講例)。またこの日の私記である「康保二年私記 橘仲遠撰」が『本朝書籍目録』にみえる。以後資料がないが、大国播磨守をつとめ、従四位上に至ったことは系図に示すとおりなのであろう。学生のころからすでに優秀であった様子がうかがえるが、ただ『二中歴』儒者歴「撰関侍読」に言う「貞信公^{大藏善行}橘仲遠^{蔵人}」には少々疑問を感じる。

大藏善行はたしかに東宮学士をつとめ、『雑言奉和』によれば延喜元年(901)秋、時平によつて城南別第において蔵外史大夫(善行)七旬の祝が催されており、その「趨庭之生」の中に「右大丞忠平」との名もみえていて、正しく忠平は大藏善行の門下の一人であり、善行はその師であった。しかし一方仲遠は、天慶年間(四年従六位上、六年正六位上)に藏人であったが、そのころ忠平はすでに摂政太政大臣(天慶四年62才、六年64才)の位にあった。その貞信公の侍読とするには、「侍読」ということばを極く普通に解する限り、仲遠にあてはめることに疑問が残る。——ともあれ学問的造詣の深かった祖父であった。

また同族には広相・公材・好古・為政等々著名な学者を出している。傍流とはいえ為義も父祖からの学問的素養を充分受け継いできたであろうことは言うまでもあるまい。

なお漢詩文人として、また詠歌活動を通してそれぞれ活躍期をもつ子息の義通、孫の義清・資成・為仲たちについては、後に述べるところがあるので、ここでは省略にしたがうこととする。



橘 為 義 考 (一)

——道長親近の一家司層の生涯——

福 井 迪 子

『源兼澄集』異本系四九・五〇番に、つぎの歌がある。

いかのかみためよし、伊賀へまかりしに、とのゝさふらひ、こ
れかれ、せんし侍しに

49 たまほこのみちのおはなにめをとめよみやこさまにそ

おほくなるらん

また、おなしひとに、せんをわたくしにし侍しに

50 後拾遺別 かくしつ、おほくの人^{ミイ}はをしへきぬ我を、くらん

としはいつそは

(松平文庫本による)

為義伊賀赴任時の、兼澄のはなむけである。かつて小町谷照彦氏は「兼澄論ノート」^{注1}において、この餞別歌について左のごとく述べられた。

伊賀に着任した橘為義との饌別^(ママ)の歌も、長保初年のことであろうか。

前掲の権記の長保三年十月七日条に、伊賀守の官名表記が見られる。^{注2}

(中略)

前者は路傍の尾花を都を偲ぶよすがにせよというのであろうか。この歌が出立して行く人を慰めようとする内容であるのに対して、後者は自己の願望を率直に表現したものとなっている。若狭守を辞してから、兼澄は国司の任をしばらく得ていない。自分がこのように別れを惜まねながら赴任して行くのはいつのことかというものであろう。同じ機会に詠まれた歌なので、公私の対照があざやかに示されていて興味深い。私に圈点を付したが、この餞別歌の詠作時についてもう少し限定できないものかと思つて、為義の伊賀守に至る間の事情など史実を追つてみたことが切掛けとなり、その生涯を通観する機会をえた。

為義の現存詩文は「本朝麗藻」に二首のみ、和歌は勅撰集に四首、但し一首は為理との誤りとみられるので実質三首（後拾遺・詞花・続古今各一首）、道長歌合の歌三首、麗花集一首は詞花集歌に同じ。後十五番歌合及び玄々集入集歌も詞花集歌に同じ。また、道長歌合の一首が万代集に入ると少なく、文壇活動についてその実態はつかみにくい。しかしその生涯は道長に密接な関係をもった一家司層の生き方として興ふかいものがある。勿論詩人として、あるいは歌人として先学の研究に多々取り扱われているが、その生涯についてはまだ管見に入らないように思う。小稿では伊賀守赴任ころまでを述べたい。^{注3}

一 先ず『尊卑分脈』によつて家系を摘記すれば、左のごとくである。